

## WRC

ラリーの最高峰カテゴリー。マニュファクチャラー4連覇を目指しGRヤリスRally1 HYBRIDで4組が参戦。

\*ロバンペラ組は今回のラリージャパンは欠場



WRC Challenge Program

Brogram

全日本ラリー選手権

MORIZO Challenge Cup

GR TOYOTA GAZOO Racing  
Rally challenge

## WRCチャレンジプログラム

WRCを目指す若手育成プログラム。本場フィンランドでの特訓に加えてWRC2や欧州ラリーへの参戦で経験を積んでいる。1期生の先輩はTGR-WRTでレギュラードライバーにまでステップアップした勝田貴元。

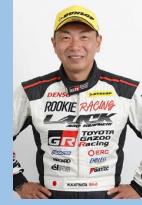


2期生の小暮ひかる/山本雄紀は24年からRally2に昇格

3期生の松下拓未/後藤正太郎も今年からトレーニング開始

## 全日本ラリー

国内ラリーの最高峰、有名選手が多く参戦。今年からは複数チームがGRヤリスRally2を導入、盛り上がりを見せている。



眞貝知志/安藤裕一ペアはGRヤリス GR4 RALLY DATでJN-1クラスに参戦。社員が監督やメカニック、ドライバーを担うことで人材育成やもっといいクルマづくりを進めている。

昨年までGRから出走していたノリさんこと勝田範彦選手はLUCK with ROOKIEからの参戦。木村裕介選手と共に、モリゾウがオーナーのGRヤリスRally2初号機を操る。

## モリゾウチャレンジカップ



総合優勝した山田啓介選手はフィンランドでの特訓やWRCチャレンジプログラムの選考にも参加予定。

## TGRラリー・チャレンジ



参加者の約半数がラリー初心者、モータースポーツの裾野を広げるラリー競技。昨年は年間で10万人以上の観客を動員し、日本各地でのラリーツーリズムで町おこしを行う



ラリージャパン翌週のラリチャレ豊田には、WRTのラトバラ代表、勝田選手も来場。さらに世界のステージで活躍するあの人も登場？！続報に乞うご期待。

## GRフェスでの種まき

## ライバルだけど意気投合:GRフェスティバル韓国

今年10月末に開催された韓国でのGRフェス。地元メーカーのヒョンデと共にメーカーの垣根を越えて盛り上げた。観客は約2800人が来場。

両社はWRCでマニュファクチャラー・タイトルを争うライバル同士…しかし今回は「クルマ好き連合」としてタイアップ、韓国のファンを沸かせた。



## モリゾウコーナー誕生:GRフェスティバル沖縄

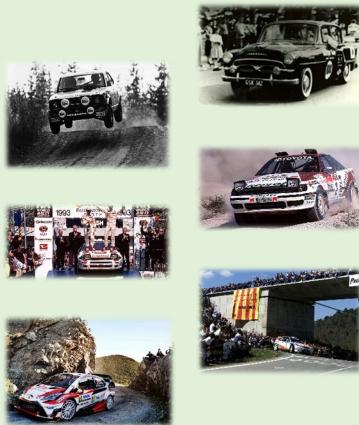


今年3月にラリチャレとセットで開催されたGRフェス沖縄。沖縄では珍しいモータースポーツイベントに約1万1000人が集結。

モリゾウがドライバーを務めたデモランでは、車両が縁石にヒット。

モリゾウコーナーと命名され、本人は外れた縁石にサインした。

## 過去のレガシー



年	出来事
1957	クラウンで豪州ラリーに参戦、トヨタにおける海外モータースポーツ初参戦となった
1973	WRC創設、プライベーターのカローラがトヨタ車として初優勝
1989	カンクネン選手、ST165セリカでの初優勝
1993	カンクネン選手がST185セリカで優勝、トヨタは初のマニュファクチャラーズタイトル獲得
1999	マニュファクチャラーズタイトル獲得、撤退を発表
2017	「あらゆる道を走る競技であるラリーは、人とクルマを鍛え上げるために最適な舞台」とのモリゾウの考えのもとWRC復帰

以降、2017年から2024年第12戦セントラル・ヨーロピアンラリーまで…

マニュファクチャラーズタイトル4回、参戦数83戦、勝利数40勝

## 商品との結びつき

GRヤリスやGRカローラはモータースポーツへの挑戦と共に生まれた。今もなおWRC、全日本ラリー、ラリチャレ、ニュルブルクリンク、S耐など様々なモータースポーツの現場で壊して鍛えるを繰り返し、進化を続けている。



年	出来事
2007	6月:Team GAZOOとしてニュルブルクリンク24時間耐久レースに中古のアルテッツア2台を改造して、成瀬弘と共に、ドライバーモリゾウとして参戦
2015	1月:2017年より、WRCへ18年ぶりに参戦することを発表
2016	12月:ヘルシンキにてWRCの体制発表会を実施 モリゾウより、GRヤリス開発指示。企画当初からWRCエンジニアと協業
2017	1月:TOYOTA GAZOO RacingとしてWRC復帰 GRヤリス先行試作初号車が完成、モリゾウ・プロドライバーと開発開始
2018	GRヤリス開発において、WRCドライバーとの評価を開始 WRC マニュファクチャラーズタイトル獲得
2019	WRC ドライバーズタイトル、コ・ドライバーズタイトルを獲得
2020	1月:GRヤリス発表 9月:GRヤリス発売日、スーパー耐久富士より参戦開始。デビューウィンを飾る ※GRヤリス発売後もマスターードライバーによるオン&オフロード評価 WRC ドライバーズタイトル、コ・ドライバーズタイトル獲得
2021	1月:ヤリ-マティ・ラトバラがチーム代表に就任 3月:全日本ラリー選手権にGRヤリスで参戦開始 5月:S耐富士より水素エンジンカローラで参戦開始(開発段階のGRカローラベース) 全日本ラリー選手権 JN1クラス チャンピオン獲得(勝田範彦／木村裕介組) WRC マニュファクチャラーズタイトル、ドライバーズタイトル、コ・ドライバーズタイトル獲得
2022	1月:GRMNヤリス発表 1月:WRCにGRヤリスRally1で参戦開始 3月:開発中の新8速ATの"GR-DAT"搭載試作車を用いて副会長の早川がラリーチャレンジに参戦開始 4月:GRカローラ発表 4月:GRアップグレードセレクションをKINTO専用車GRヤリス"モリゾウセレクション"から導入開始 WRC マニュファクチャラーズタイトル、ドライバーズタイトル、コ・ドライバーズタイトル獲得
2023	3月:全日本ラリーに"GR-DAT"搭載試作車を用いて参戦開始 8月:GRカローラ一部改良発表(抽選販売:RZ 550台) 9月:S耐に"GR-DAT"搭載試作車を用いてモリゾウが参戦 WRC マニュファクチャラーズタイトル、ドライバーズタイトル、コ・ドライバーズタイトル獲得
2024	1月:GRヤリスRally2をTGR-WRTを通じて世界中のお客様に販売開始 1月:進化型GRヤリス("GR-DAT"追加設定)、GRヤリス「WRCドライバー監修特別仕様車」を発表 8月:進化型GRカローラ発表("GR-DAT"追加設定)

## GRヤリスRally2のデビューイヤー (\*2024年11月時点)

出走: 出走回数228回(参加イベント数125戦)

ポディウム獲得数111回

うち1位48回、2位40回、3位23回

出走した国29か国(欧州22か国、南米5か国、豪州、日本)  
出走ドライバー/コ・ドライバー数64組

チャンピオンシップ:

WRC2 現在3位

\*今大会2位以上で逆転優勝

オーストラリア選手権 現在1位

スペイン選手権 優勝

フィンランド選手権 優勝

イギリス選手権 優勝

FIA Mitropa選手権 優勝

イタリア選手権 2位

全日本ラリー選手権 2位、3位

パラグアイ選手権 3位

## ラリージャパンに挑むGRヤリスRally2

2位以上でWRC2王者

海外勢			
日本勢			
WRCチャレンジ			
WRCチャレンジ			

イギリス選手権王者

海外勢			
日本勢			
WRCチャレンジ			
WRCチャレンジ			

イギリス選手権王者

2位以上でWRC2王者

海外勢			
日本勢			
WRCチャレンジ			
WRCチャレンジ			

2位以上でWRC2王者

イギリス選手権王者

&lt;p

# 全日本ラリー(2025年3月時点)

## ◆全日本ラリーとは

全日本ラリー選手権は、国内におけるラリー競技の最高峰。多いところで約15ヶ所のSS（スペシャルステージ）を走行。1回のラリーでのSS総走行距離は50～100km以上、移動区間（リエゾン）も含めた総走行距離は約300km～約700kmなど大会の規模によって様々。

6つのクラス：駆動方式や排気量などでクラス分け。見応えある戦いと、多様な車種構成を実現。昨年まで「JN-6」クラスとして存在していた環境対応クラスは、「JN-X」クラスとして2.5L以下の電動車へと対象が広がり（元々の対象は1.8L以下）、電動車によるサステイナブルな挑戦への期待を感じる名称となった。

JN-1	Rally2(FIA公認)、AP4(ASN公認)やこれらに準ずる車両 GRヤリスRally2、ファビアRally2など
JN-2	RJ車両(2.5L以上)およびRRN車両(排気量区別なし) GRヤリスが主流
JN-3	1.5～2.5LのFR GR86/BRZや先代86などが多く参戦
JN-4	1.5～2.5LのFFおよび4WDのRJやRPN車両 スイフトスポーツが主流
JN-5	1.5L以下のFF(ATを含む) マーチ、デミオ、ヤリスなど 車種が豊富、車両価格も抑えめで人気のクラス
JN-X	2.5L以下のAE車両 ヤリスハイブリッド、アクア、CR-Zに加え、 <b>三河湾ではRAV4PHVが登場</b>

\*AE車両：電気モーター、または電気モーターとエンジンを併用して動力とする車両

## ◆バラエティ豊かなトヨタ車が全日本ラリーに参戦

全日本ラリーには**HEV、PHEVも含めて様々なパワートレインのトヨタ車が参戦**している。これにより、多様なクルマをラリーの現場で鍛えることにチャレンジしている。

車種	パワートレイン	クラス
GRヤリスRally2	1.6Lターボエンジン	JN-1
GRヤリス(含DAT)	1.6Lターボエンジン	JN-2、モリゾウチャレンジカップ
GR86、86	2.4Lエンジン	JN-3
ヤリス、ヴィッツ	1.5Lエンジンなど	JN-5
アクア、ヤリスハイブリッド	1.5Lエンジン+モーター(HEV)	JN-X
RAV4 PHV	2.5Lエンジン+モーター(PHEV)	JN-X

## ◆全日本ラリーを通じたもつといいクルマづくり

### GR YARIS Rally2の開発

- ・WRCを通じて得た知識を活用した、もつといいクルマづくりの一環で、世界のカスタマードライバーにとって重要な競技規定「Rally2」に参加可能なモデルとして開発された車両。
- ・ヨーロッパを中心に世界の道でテストを実施し、日本での走行テストを兼ねた全日本ラリー選手権参戦を含め15,000km超を走行。2022年のラリージャパンではモリゾウが自ら初号車のステアリングを握り、車両の完成度を確認した。
- ・世界で活躍するGR YARIS Rally2



2025年、2年目のRally2は、若手も含めて幅広いドライバーに世界中で支持いただいている。世界中のカスタマーから多くのフィードバックを得ることで“もつといいクルマづくり”につなげ、さらなるラリーをはじめとしたモータースポーツの盛り上がりを図っていく。

参考→【密着1年】GR Yaris Rally2誕生の記録「道が人を鍛え、クルマを鍛える」  
(<https://toyotatimes.jp/newscast/065.html>)

# 全日本ラリー(2025年3月時点)

◆「KIZUNA」と「全日本ラリー」はGRヤリスを鍛えるのに欠かせない場所

KI  
ZU  
NA

全日本ラリー

20年～KIZUNAでの評価スタート

21年～GRヤリス で参戦

23年～GRヤリス Rally 2  
(開発モデル)で参戦

24年～GRヤリス Rally 2  
(市販モデル)で参戦

23年～GRヤリス DATで参戦

全日本ラリー(新城/三河湾)  
へのGRヤリス参戦台数

21年  
4台

22年  
12台

23年  
13台

24年  
20台

25年  
24台

約5万台

市販車  
GRヤリス



★20/9 GRヤリス発売

20年

21年

22年

23年

24年

25年



★24/1 GRヤリス Rally2発売



★24/1 進化型GRヤリス (DAT)発売

※グローバル  
販売台数

## ◆「KIZUNA」はGRヤリス開発の拠点

“KIZUNAダートコース”はマスタードライバーによる試作車や量産車の試乗を繰り返す開発の現場。GRヤリスではクルマとの対話を重要視し、開発車両である通称207号車はKIZUNAダートで約2年をかけて1,000キロ、ラップ数にして約1,000周相当を走行。



## ◆トヨタ初のDAT搭載～“もっと身近なモータースポーツ”への新たな挑戦

サーキット走行やモータースポーツ参加のハードルを下げる、裾野を広げていきたい、というモリゾウの願いを込め、23年からはGRヤリスDATで参戦。MT同様の感覚で走れるレーシングなATとして、レースへの出場など実践を重ねることでクルマを徹底的に鍛え上げた結果、24年にはDAT搭載の進化したGRヤリスの市販に至った。



## ◆「全日本ラリー」で磨かれたGRヤリス

全日本ラリーは「走る・壊す・直す」ことによる“もっといいクルマづくり”にとって絶好の舞台。挑戦と失敗を繰り返しながら、「壊してくれてありがとう」を合言葉に日々車両を磨き上げ、その知見は、市販車にもフィードバック。GRヤリスの累計販売台数は約5万台に達する。また、この車で全日本ラリーに出場するドライバーも増加するなど多くのお客様から支持をいただいている。



## ◆もっといいクルマづくりと人材育成

多くの人に乗っていただくことによる大量のフィードバックを通じて、もっといいクルマづくりにつなげ、進化したクルマにまた乗っていただく好循環を生み出している。

過酷な実践での経験を通じた人材育成を通じて、品質とスピード感のさらなる向上を図っている。



## ▼TGRラリーチャレンジとは

- ・ ラリーチャレンジとは、参加者の約半数がラリー初心者というビギナー向けのラリー競技。前身の"TRD Vitz Challenge"から数えて24年目を数える。
- ・ 国内Bライセンス(※)があれば、GRヤリスやヤリス、GR86、TOYOTA 86だけでなく、アクアなどのハイブリッド車やAT車でも参加できる点が特徴。また、初心者にも優しいコース設定が施されるなど、初心者でも安心して競技に参加できるよう工夫されている。

## ▼ラリー競技に取り組む目的

### ＜クルマを鍛える＞

- ・ サーキットで行われる“レース”と違い、公道（主に林道）で行われる“ラリー”では、未舗装の地道、砂利道、古くて荒れた舗装路、最新のアスファルト道路などさまざまな路面がコースとして使用される。こうした条件下で、クルマを極限の状態で酷使することで、クルマを壊し、直し、鍛えていく。
- ・ 2023年のラリーチャレンジ全体の走行距離は**852.7km**（出走車＝計807台）、**延べ走行距離は約63,000km**。日本列島5周分、**地球1周半に相当する距離**を走り、クルマが鍛えられている。

### ＜まちおこし＞

- ・ 2023年の実績では、シーズン全体で過去最高の約10万人の来場者を記録した。これは、豊田市の人団(42万人)の1/4に相当する。勝山(福井)や利府(宮城)では、**来場者数がまちの人口の4割～半分近くに達した。**経済効果では、**年間で35～40億円※の消費活性効果の可能性**がある。
- ・ 勝山(福井県)や利府(宮城県)、蘭越(北海道)、茅野(長野県)では、来場者による消費活性効果が**自治体の年間税収の約1割**に相当した。

※シーズン全体の来場者数10万人の国内旅行平均額＝約3.7万円（出典：観光庁。日帰り・宿泊平均）を消費したと仮定し推計